

二つの劇作品「アイダ」と「勧進帳」への 比較文化論的視点からのアプローチ (Ⅱ)

池上 敏・野波 健彦・佐川 信夫*

An Approach to the two musical Dramas, Opera "Aida" and Kabuki Music
"Kanjinchou" from a cross-cultural Perspective

by

Satoshi IKEGAMI, Takehiko NONAMI, Nobuo SAGAWA*

(Received November 29, 1991)

[Abstract]

In the previous paper we studied the possibility of an approach to the teaching of music appreciation to junior high school students from a cross-cultural perspective. We analyzed the data we obtained from an appreciation experiment in which we had a group of junior high school students watch the opera "Aida" and the kabuki "Kanjinchou", two masterpiece dramas from the West and the East, close in time. We hoped the study would help to provide a better teaching material for music appreciation.

Our vision seems to be supported by Keith Swanwick, who notes "the first and unique aim of music education in schools and colleges is to raise to consciousness and explore a number of musical procedures, experienced directly through the reality of various intercultural encounters."¹⁾

For the present paper, we performed the same experiment with a different group of students of the same age to reexamine and confirm the observations we presented in the previous paper. Based on the revised analysis we try to provide more specifically what we think should be taught to junior high school students in the music appreciation from a cross-cultural perspective.

Key words : musical drama, opera, kabuki, cross-cultural perspective, the teaching of music appreciation

* 山口大学教育学部附属山口中学校教諭

I はじめに

K.Swanwick は、「学校や大学における音楽教育の特有の目的の一つは、いろいろな相互=文化的な出会いの現実をとおして、直接的に経験される多くの音楽上の手順を、意識化して目的をもって厳密に探求することである」と述べている。この考え方は、我々の考えている東西の二つの劇作品、「アイダ」と「勸進帳」を並べて比較しながらそれらのもつ同質性・異質性といった内容を指導するという比較文化論的視点からの音楽鑑賞のアプローチをよく支持してくれているように思う。前回、我々は鑑賞指導における教材への一つのアプローチの可能性を探るために、実際に中学生にこれらの二つの劇作品を鑑賞させて、実験授業を実施した。そして、そこで得られたデータをもとに中学生を受容者にした場合の比較文化論的な視点からのアプローチの可能性を検討した。その結果、我々は次のような見解をもった。すなわち、それは、①生徒たちは発声法や舞台の造りなどに東西文化の相違をかなりの程度気がついていること、②東西文化の表現様式の相違を超えて「劇」というものの本質に気がついていること、③東西両文化とも音楽が作品全体に効果を与えるという点では同じであるということに気がついていること、であった。

本稿では、比較文化論的な視点からのアプローチで中学生に教えるべき指導内容をさらに検討した。また、前回の結果を再び検証し確認するために同じ年齢の中学生に、同様な実験授業を実施した。この実験結果の分析を基に、比較文化論的な面での指導の可能性や指導の留意点についても検討した。

II 比較文化論的視点から提示する音楽的要素の検討

このたびの実験授業を行うにあたって、共同研究者の3人は比較文化論的視点から提示する音楽的要素の検討、並びに関連要素についての意見交換を行った。その際、3人の研究者から出された音楽的な要素はほぼ次の4点に集約される。

- (1) 音楽構造の違い、特に作曲手法に関わるもの。
- (2) 発声法と言葉の問題。
- (3) 音楽的構成と劇的效果の関連。
- (4) 作品全体に占める音楽の重要度の違い。

これらの諸点については大部分、前稿（I）の第Ⅲ章の②、第4節の「音楽」の項で触れているが、ここでさらに掘り下げて分析を行う。

(1) 音楽構造の違い

前稿では、西洋音楽の手法を「同時に鳴り得る異なった複数の音を、どのように秩序づけ、音楽表現として用いるか」ということの体系化」とみなし、長唄にみられるような作曲法を「使われている基本的な音は極めて少ないのであるが、それに付随している様々な要素、すなわち大きなヴィブラート、ポルタメント、自由な間の取り方などがまさに音楽の生命そのもの」と解説している。

ここで、西洋音楽と日本の音楽についてそれぞれを構成する要素を対応させながら列挙すると、次のようになろう。

西洋音楽の作曲手法上の特徴

- ①機能と声法に代表されるホモフォニーと、対位法に集約されるポリフォニーの混合的使用の方法論であると定義できる。3度の堆積による和音を基としている。
- ②①の基礎として、「調性」の概念の確立を根底とする。
- ③極めて論理的、組織的、かつ体系的である。

日本の音楽の大部分に共通する作曲手法上の特徴

- ①モノフォニーとヘテロフォニーを表現上の主要な方法論であるとし、音そのものに付随する様々な属性の強調によっている音楽であると解説できる。音と音との出会いは4度の堆積を基とし、その結果生ずる2度を独立的に扱うこともときどきみられる。
- ②五音音階に代表されるモードを音組織の核にしている。
- ③極めて感覚的で経験主義的な色彩が濃い。

では、実験の対象としている二つの劇作品ではこれらがどのような使われ方をしているか、実例を挙げて分析してみよう。

「アイダ」第2幕第2場は総譜によれば Gran Finale となっている。有名な凱旋行進曲とそれに続く戦勝祝賀の場であるが、基本となる調性は変ホ長調、四分の四拍子である。西洋文化圏の音楽では、この変ホ長調という調性が「英雄」的な雄々しさや偉大さを表現するのに最もふさわしいものと考えられしばしば使われたことは、ベートーヴェン（作品55の「英雄」交響曲）やリスト（超絶技巧練習曲第7番「エロイカ」）の例を挙げれば充分であろう。ヴェルディも何を表現すべきかを的確に把握して、それに対して最もふさわしい調性を選択したと考えられる。続く場面でも、その場その場の音楽的要請に最もふさわしい調性が選ばれている。

第2幕第2場冒頭の凱旋行進曲やこれに続くバレエの音楽は、はっきりとした拍節感をもつ一つの主要な旋律が支配的であり、他の声部は従属的に扱われている。かなりはっきりとしたホモフォニック的傾向を示していると言える。それに対して、後半の主要登場人物6人による六重唱に民衆と僧侶たちの合唱が加わる場面では、各々の人物の歌う歌詞内容に即した旋律づけがなされており、音組織の上だけではなく歌詞の上での対位法も見事に実現されている。すなわち、ポリフォニック的傾向が支配的であると言える。体系立った音組織を支配する方法論の確立という裏づけなしには極めて多数の音を統御しなければならないこのような音楽の作曲はおそらく不可能であろう。しかし、ここで見落としてならないことは、かなり長いこの場面がずっと四分の四拍子であり、リズムの上からもさほどの複雑さはみられないことであろう。こういう所に西洋音楽の組織化がどういう方向に関心を向けていたかを見て取ることができるように思われる。

「勸進帳」の音楽的特徴は上に述べた特徴を大きく出たものではない。音楽的には五音音階を基礎とした陽・陰両旋法に基づいており、役者の台詞と地の謡いは別扱いと考えられよう。役者の台詞は明らかに、音楽的というよりは演劇的要請によっているが、地の謡いははっきりと音楽的なものを目指しており、音楽としての検討対象となろう。しかし、ほとんどの部分で

半ば語理的な声楽に対してヘテロフォニー的に三味線が絡むか、あるいは三味線の合の手に四拍子と鳴り物がリズム的に加わるという構造であり、音の縦の重なり方、重層的な音楽の進行という面から分析すれば極めて単純である。反面、音そのものもっている様々な要素の強調により音楽をつくるという点では驚くほど多彩な表現を獲得していると言えよう。これらが主として流派の開祖と呼ばれている人々の個人的な歌い方の工夫による産物であるということからも推察されるように、日本近世の音楽表現は個人の経験と創意による部分が極めて大きい。

なお、「音の重なり合い」という観点からつけ加えておくと、この「勸進帳」に限って言えば台詞の重層的同時進行は全く見られない。わずかに劇的な要請に従って富樫と弁慶の台詞の各々の終わりの方に次の初めの部分が少しかかるということがみられる程度である。

(2) 発声法と言葉の問題

この点に関して一番主要なことは、前稿ですでに述べている。「アイーダ」がイタリアのベル・カント唱法によっていること、また、歌舞伎（邦楽）の発音が極めて聞き取りにくいということに尽きる。これらの違いについて考える際には、柴田南雄がイタリアとドイツと日本の新聞売りの呼び声を比較し「物売りの呼び声は民族の音楽性の原点にちがいない。」⁹⁾と指摘していることなどが一つのヒントとなろう。歌舞伎の発声法については補足的に次のような意見をつけ加えたい。

江戸時代の大都会の状況を考えると、歌舞伎はおそらく当時一番の大衆の娯楽であり、庶民階級の大関心事であったであろう。舞台上で演じられる内容もかなりの部分彼らがすでに知っていることであり、歌舞伎の発声法や言葉の扱いもそれを前提で見に行くのであるから、おそらく想像で言葉を補い聞き落とした部分を自分で補って鑑賞していたのであろう。ここで重要なことは、一つ一つの言葉の意味内容よりはその言葉のもつ感情部分を拡大して訴え、その結果観客にカタルシスを引き起こすことにあったことである。ワグナーの歌劇の言葉をドイツ語を母国語としている人でも一語も漏らさず全部聞き取っている人などまれであるという一般に言われている説や、バッハのカンタータなどに見られるような一つの言葉をメリスマ的に扱った場合などもおそらく同様であろう。母国語どうしによる言語伝達でも必ずしも完全に伝わらないことは、子どもたちの「言葉送り遊び」一つを取ってみてもかなりはっきりしている。歌舞伎に限らず、あのような発声・発音には言葉を音節の集まりとして伝達するよりも、もっと別な目的があるということを考えねばならないだろう。

共通点は洋の東西を問わず、呼吸法・発声法にもみられる。基本的には腹式呼吸、頭声発声を効果的に使用することなどが指摘できよう。「勸進帳」では男役ばかりで女形が登場しないので分かりづらいが、女形の発声は明らかに頭声発声であるし、洋楽でもファルセットをいかに使いこなすかが発声法の重要な課題であることは指摘するまでもないであろう。

(3) 音楽的構成と劇的效果の関連

この表題は、これだけではどのようなことを意味しているのかが分かりづらいが、筆者は音楽的な高揚・鎮静の波と、劇としての高揚・鎮静の波との相関関係と考えている。音楽は音楽として独自の構成論理をもってその高揚・鎮静を形づくるが、劇音楽、特にオペラの場合には音楽的な波と劇としての波が一致することが極めて重要であり、それが十分に達成されていない作品は失敗作とさえ見なされる。「アイーダ」第2幕第2場においてはこの音楽的構成と演劇的要求が見事に一致している。凱旋の行進曲の合唱やバンダ、バレエの音楽、それが終わっ

て、エジプト王が威厳をもって戦勝の武将ラダメスに言葉をかける時、さらには先ほど例に挙げた六重唱など、いかに歌詞内容に即した音楽づけが行われているか、歌詞内容や劇作品の要求するものをいかに的確に表現しているか、作曲者ヴェルディの練達の筆を見ることができる。

「勸進帳」の場合もこの高揚・鎮静の波は劇と音楽とでほぼ一致しているが、これは歌舞伎の下座音楽が歌舞伎という舞台芸術の発生当時からいわば効果音楽・踊りの伴奏音楽として発達してきた経緯を考えれば当然とも言えよう。この作品において特徴的な音の使われ方としては、幕切れの弁慶が六法を踏んで花道を引き揚げて行くところを指摘できよう。ここでは一つの拍子木がこの場面の伴奏を勤める。多くの楽器が打ちそろってにぎやかにという音楽のつけ方はされていない。歌劇ならばまず例外なしに盛大に管弦楽と合唱がフォルティッシモで華やかに奏することになるであろうが、こういう所にこういう終わり方を考えついた「勸進帳」の作者の感覚は、明らかにオペラ作曲家のそれとは違っていた。ここでは確かに劇的な高揚はあるが、音楽的な表現としては極度に手段の節約があり、音響的な高揚とは一致していないと言える。

二つの作品には、起承転結の構造を共通に見出し得ることも前稿で指摘しておいた。「アイダ」第2幕第2場においては、凱旋の場を起、エジプト王が戦勝の武将ラダメスに言葉をかける場面から承、先ほど例に挙げた六重唱を中心とする場を転、始めと同じ音楽に戻って結、と位置づけられる。「勸進帳」では富樫の名乗りから義経主従の一行登場、安宅の関に差し掛かる場面までを起、関でのやり取り、勸進帳の読み上げ、山伏問答の場などが承、疑い晴れて関を出ようとする一行が呼び止められ、緊迫する場面から転、何とか難を切り抜け関を通過して弁慶が義経に非礼を詫げる所から幕切れまでを結、とすることができる。このように劇作品の構造や、音楽の扱いの共通点と相違点を明確にすることによっても文化的な特徴を的確に認識させることができるであろう。

(4) 作品全体に占める音楽の重要度の違い

これについても前稿で触れた。主要な点は前稿でほぼ出ていると考えられるので、ここではその内容を簡単に整理し、(1)と同様に例示しておくことにとどめる。

オペラの場合

- ①音楽、特に歌が中心的な存在であり、歌をどのように聴かせるかが重大な関心事である。
- ②作品全体に占める音楽の割合は極めて大きい。音楽を中心に他の諸芸術がその周辺に協力して構成されるものである。
- ③舞台上の演技者は同時に歌手であり、歌手でなければ主要な登場人物としては舞台へは上れない。

歌舞伎の場合

- ①芝居・踊りを中心とした、見る要素の極めて強いもの。演劇的・舞踊的な性格が支配的である。
- ②作品全体として見た場合、音楽はどちらかと言えば従属的な扱いを受ける側に位置すると言えよう。
- ③歌舞伎では舞台に上る人は俳優、または役者であり、音楽担当者が歌舞伎で主役になることはまず考えられない。

以上のような少し掘り下げた分析をした上で、実験の中で中学生に対して比較文化論的な立場から提示し得る音楽的要素としては、本章の始めに示した(1)から(4)の4項目から、

(1) 音楽構造の違い、特に作曲手法に関わるもの。

(2) 発声法と言葉の問題。

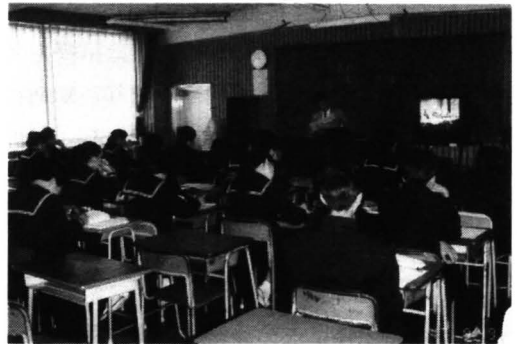
の2項目が適切であるだろう。

Ⅲ 今回の実験授業の分析と考察

本章では、前稿全体の内容、特に「第Ⅱ章 研究授業・実践例と分析」に示した考察結果を踏まえて、前回の結果を再び検証し確認するために行った実験授業について、分析・考察する。

授業者(佐川)は、山口大学教育学部附属山口中学校の2年D組の生徒を対象に、①極めて近接した時点で二つの劇作品に関連性をもたせて鑑賞させる、②どのような点に着目させるかについては鑑賞する生徒各自の自由意志に任せる、という考え方で実験授業を行った。

実験はオペラ「アイダ」第2幕第2場が平成3年10月14日(月)第6校時(14:10~15:00)に、歌舞伎「勸進帳」が10月17日(木)第2校時(9:35~10:25)に各々ビデオ視聴による鑑賞授業として実施した。授業時間の関係からそれらの鑑賞は2曲とも全体ではなく、かつ細切れなものになった。また、テレビ視聴の間に授業者が短くコメントするという形の授業にならざるを得なかった。



授業者は「勸進帳」の視聴の際、「このまえ視聴したアイダと比べてみたらどうかな。」という内容のコメントをした。またこのことは授業時に配布した学習カードにも印刷しておいた。これら二つの授業の指導案については末尾に添付してある。

次に「勸進帳」の授業における生徒たちの反応を音楽学習カードからいくつか紹介する。これについては生徒たちが書いたものをそのまま掲載する。

例1 (男子生徒)

オペラは、明らかに歌っているという感じだが歌舞伎は歌っているという感じより、特ちょうのある言い方でセリフを言っている。

オペラの方が動きも声も幅が大きい。

オペラはたえず、歌が、音楽が流れているが歌舞伎は、セリフのあいまに音が鳴る、ということだけで、たまにセリフの声や音楽が1時的に大きくなることもある。

セリフを何を言っているのか分からなかった。

しかし、オペラより、だれが、だれであるかがとても分かりやすかった。

例2 (女子生徒)

- ・歌舞伎「勸進帳」は言葉使いや、言葉のリズムがよく理解できなくて、何を言っているのかよく分からなかった。
しかし、その場のふん囲気で少し分かったような気がした。
音楽が昔風というか、日本風の笛や三味線、つづみなどが使っており、日頃聴き慣れていないものなのでごくよかった。
動作などが、はっきりしているが歌舞伎特ゆうのものなのでどんな気持ちを表しているのか、というようなことがよく分からなかった。
- ・古語が使っているため、その言葉や、言葉のリズムがよく分かればもっと楽しめたと思う。

例3 (女子生徒)

- | | |
|-------------|--|
| 歌
舞
伎 | <ul style="list-style-type: none">・楽器がステージにあがっている・発音がよく分からない (何言ってるのか)・動きがかたくなるしい・衣しょうが同じようなもの (分からない)・化しょうがスサマジイ (顔面真っ白)・表情がはっきり分かる・じっと止まることが多い |
| | なにを言っているのか分からなく、メインとその他の差がはっきりわかる、はく力のあるシーンもあるが、動きがかたくなるしい。 |

- | | |
|-------------|---|
| オ
ペ
ラ | <ul style="list-style-type: none">・楽器がステージにあがっていない・声の高低がしっかり分かる (何言ってる)・動きが自然・衣しょうがいろいろある (のかは字まくで分かる)・化しょうがスサマジイ (目もとがとくに。女性だけだけど) |
| | 字まくがあるので何を言っているのかは分かるが、メインとその他の差がそんなにないところがある。人数がガバツといる
シーンにはく力がある、動きが自然で分かりやすい。

・何を言っているのか分かったらもっと楽しめると思う。 |

これらの他に、生徒達の反応を部分的にいくつか紹介すると、

- ・「勸進帳」はハーモニーとかがなかった。(男子生徒)
- ・アイダの方は口を大きく開けて大きな声を出していたけど歌舞伎の方は口をわりと小さく開いて大きな声を出しているの、発声に違いがあるのかな？(男子生徒)
- ・「アイダ」の歌は「歌」という感じがしたが「勸進帳」の方は、歌というより「会話」にちかかった。(女子生徒)

のようになる。

以上の例も含めた2年D組の生徒たちが提出した全学習カードを生徒の反応という面から分析し、その内容を整理すると以下ようになる。(生徒たちの書いたものをできるだけ尊重した)

○歌舞伎「勸進帳」の場合

- ・台詞の役割が大きい
- ・特有の動作や音がある
- ・音楽と化粧の顔がよく合う
- ・役者は歌ってはいないようだ
- ・背景が決まっている
- ・男性のみで高い声で揺れて歌う
- ・踊りはうまい
- ・奏者が少ない

○オペラ「アイダ」の場合

- ・常に音楽が鳴りリードする
- ・ステージのスケールがでかい
- ・言葉とリズムが一緒である
- ・歌い演じてハモる
- ・声に迫力がある
- ・感情が歌で伝わる
- ・音楽的要素が多い
- ・指揮者がいる
- ・多くの人がいる

共同研究者の3人は、今後実施を考えている実験授業で提示する音楽的要素とその指導の留意点を明確化するために検討を行い、次のような結論を得た。

- 1) 何人かの生徒は特別なコメントなしでも音楽構造の違いを、音の違い・歌い方の違いとしてとらえている。
- 2) 大部分の生徒が歌舞伎の言葉が分かりにくいと感じているが、オペラと比較することで何人かの生徒は発声法が違うのではないかと気づきかけている。

また、本実験としての授業を進めて行くに際しては次のような留意が必要であるという点で研究者は意見の一致をみた。これらは一般論としてもある程度言えることであろう。

- ・「アイダ」を視聴してから「勸進帳」に入る方が視聴する側の理解が容易であろう。
- ・「アイダ」のリアルでダイナミックな効果から、「勸進帳」のナイーブな味わいへ向かう方が生徒には受容しやすい。
- ・効果音や超絶技巧のすばらしさにも気づくようになる。
- ・二つの作品のストーリーを事前に調べさせておくと、着眼点が確かになり意欲的に視聴する。
- ・名旋律を演奏したり、名場面の言葉を復唱したりすることで作品に対して主体的な関わりをもたせる。
- ・二つの作品の特徴的な場面で歌や動作による表現を比較させると関心が高まるであろう。
- ・よい映像・音響の提示のためには最大限の努力をし、労を惜しまないようにする。

IV おわりに

次稿では、今回の実験授業の結果に基づいて検討し絞りこんだ比較文化論的視点からの音楽的要素を提示する実験授業を実施し、その結果の分析と考察を行って、二つの劇作品、「アイ

ーダ」と「勸進帳」に対する比較文化論的視点からのアプローチの可能性、有効性について論じて行くつもりである。

引用・参考文献

- 1) K.Swanwick,(1988); Music,Mind, and Education,Routledge p.118
- 2) Ricordi社(Milano)他による
- 3) 柴田 南雄,(1976);「楽のない話」全音楽譜出版社 p.146

音楽科学習指導案

1991年10月14日（月）6校時 2年D組 指導者：佐川 信夫

1 教材 劇音楽を楽しむー歌劇「アイダ」より第2幕第2場ー

2 教材のとらえ方

- (1) 生徒はオペラには直接接した経験はないが、物語りや音楽のいろいろな演奏形態による表現力には関心を寄せている。

最近のAV機器の発達と映像ソフトの充実により、テレビでオペラを見ることができるようになった。しかし、臨場感のある劇場での鑑賞の機会は未だ極めて少ない。

- (2) イタリア音楽に顕著な旋律の美しさと、絢爛豪華な舞台と、巧みな物語りの運びによって圧倒的な迫力を持つこのオペラは、生徒に十分楽しめる作品である。

ソロ、デュエット、クワルテット、コーラスにオーケストラ、バレエ、そして衣装や舞台装置によってドラマチックに展開されるこのオペラは鑑賞する者を圧倒する。音楽を中心に構成された総合芸術が、優れた表現力と砥ぎ澄まされた感性で創造されていくこの営みは、生徒の純粋な心を捉え、豊かにしていくものである。

- (3) 表現に関わって自らの課題を持ちVTR視聴することで、劇と音楽の総合的な把握をさせ、音楽表現のすばらしさを鑑賞する力を伸ばす。

音楽を自ら感得し美しさを求める生徒、音楽する力を培い感動を大切にする生徒の育成をめざして、音楽科の授業では感性を磨く学習課題の設定・検証とそれらの充実に取り組んでいる。音楽的知性と豊かな感性を伸ばすために、生徒自らが音楽の諸要素に迫ることができる学習課題の設定とその追求活動を仕組むことが重要である。

そこで、オペラでのドラマチックな歌手の歌唱、コーラス、オーケストラ、それら相互の音楽的対話、登場人物の心情と舞台設定、演出効果などの点に関わった課題をもたせて鑑賞させ、この楽曲のすばらしさを感得させるようにする。

3 学習計画 ーオペラ「アイダ」を鑑賞するー

- | | | |
|------------------|-----|------------|
| (1) 物語りと有名な旋律を知る | ——— | 1時間 |
| (2) オペラの概要を調べる | ——— | 2時間 |
| (3) 鑑賞する | ——— | 2時間（本時1/2） |

4 本時の学習指導

(1) 主眼 登場人物の心情を想起しながら、壮大な凱旋の場の音楽構成と歌劇の演出に着目して鑑賞することができるようにする。

(2) 授業の過程

学習内容・学習活動	教師の手だて
<p>1 本時の学習課題を確認する。 ・最も関心のある人物やことからマークしておく。</p> <p>2 登場人物の心情を想起する。</p> <p>3 凱旋行進曲のテーマからこの舞台の様子を想像する。 ・凱旋門やエジプトの史跡などからも荘大さに思いをめぐらす。</p> <p>4 テレビを視聴する。</p> <p>5 感動を話し合う。</p> <p>6 次時の学習の計画を立てる。</p>	<p>1 第2幕第2場の舞台面を見せながら確認させる。</p> <p>2 歌手の表情や歌唱力に着目させるようにし、それぞれの立場にも説明を加える。 ・ラダメスとアイーダ、父アモナズロの心情と、アムネリス王女との関係をおさえる。</p> <p>3 音楽からのイメージを豊かにさせて鑑賞に導く。</p> <p>4 VTRで提示し、音響に配慮するように工夫する。</p> <p>5 オペラのすばらしさを自由に語り合わせ、各自の課題についてメモをとらせる。</p> <p>6 まとめができるように、鑑賞のポイントを持たせる。</p>

音楽科学習指導案

1991年10月17日（木） 2校時 2年D組 指導者：佐川 信夫

1 教材 劇音楽を楽しむ－歌舞伎「勸進帳」－

2 教材のとらえ方

- (1) 生徒は劇的効果を高める音楽を体験して、物語りやいろいろな音楽の形態の表現力に強い関心を寄せている。
- (2) 長唄やお囃しの醸し出す日本の情緒や、武士のあり様を示す物語りとスリリングな舞台は、生徒が十分楽しめるものである。
- (3) 表現に関わって自らの課題を持ちVTR視聴することで、劇と音楽の総合的な把握をさせ、音楽表現のすばらしさを鑑賞する力を伸ばす。

音楽を自ら感得し美しさを求める生徒、音楽する力を培い感動を大切にする生徒の育成をめざして、音楽科の授業では感性を磨く学習課題の設定・検証とそれらの充実に取り組んでいる。生徒の創造的な音楽的知性と豊かな感性を伸ばすために、生徒自らが音楽の諸要素に迫ることができる学習課題の設定とその追求活動を仕組むことが重要である。

3 学習計画 ー歌舞伎「勸進帳」を鑑賞するー

- (1) オペラを鑑賞する ー 1時間
- (2) 物語りと有名な旋律・場面を知る ー 1時間（本時）
- (3) 歌舞伎の概要を調べる ー 2時間
- (4) 鑑賞する ー 2時間

4 本時の学習指導

(1) 主眼 登場人物の心情を想起しながら、安宅の関の場の急・緩・急による音楽構成と歌舞伎の演出に着目して鑑賞することができるようにする。

(2) 授業の過程

学習内容・学習活動	教師の手だて
<p>1 本時の学習課題を確認する。</p> <p>・最も関心のある人物やことがらをマークしておく。</p>	<p>1 花道から登場する舞台面を見せながら確認させる。</p> <p>・学習カードに記入させておく。</p>
<p>2 登場人物の心情を想起する。</p>	<p>2 役者の表情や演技と音楽に着目させるようにし、それぞれの立場にも説明を加える。</p>
<p>3 セリの合い方からこの舞台の様子を想像する。</p> <p>・義経主従の道中を考える</p>	<p>3 音楽からのイメージを豊かにさせて鑑賞に導く。</p>
<p>4 テレビを視聴する。</p>	<p>4 VTRで提示し、音響にも配慮して視聴させる。</p>
<p>5 感動を話し合う。</p> <p>・惹かれたところとその理由を言えるようにする。</p>	<p>5 歌舞伎のすばらしさを自由に語り合わせ、各自の課題についてメモをとらせる。</p>
<p>6 次時の学習の計画を立てる。</p>	<p>6 さらに知りたいことをまとめ、鑑賞のポイントを持たせる。</p>